

アイヌ民族と和人の相互理解におけるプレイバックシアターの可能性

スクール・オブ・プレイバックシアター日本校

2019年 4月 28日

山畑 祐子

<要旨>

この論文の目的は、アイヌ民族と和人の相互理解において、プレイバックシアターの要素がどのように関わるかを考察したものである。

アイヌ民族が関わっている事例を挙げ、プレイバックシアターの公演で、アイヌの方々が語ったストーリーとして想定し検証した。テラーの席で語られたストーリーは、そこに参加している人々にただ、受け入れられることでコミュニティの場となりアイヌの方々と和人の相互理解になり得るということがわかった。すなわちそこには、プレイバックシアターの要素が十分に組み込まれるということである。

<目次>

I はじめに

【研究動機】

【研究目的】

II アイヌ民族について

1. アイヌ民族とは
2. アイヌ民族の軌跡

III アイヌ民族をめぐる差別とそれが起きる背景を探る

IV プレイバックシアターの可能性

- 1 演じられた個人の実体験を観ることで、観客は事実を受け取り、共感できる。
- 2 テラーは、安全な場所で懸念表明することができる。
- 3 テラーは、アイヌ民族の文化や精神性、価値観を劇として観ることで、自分を受け入れ、アイデンティティを明確にすることができる。
- 4 自分の行動を客観的に見ることができ、新たな視点を得ることができる。

V まとめ

VI おわりに

VII 文献

I はじめに

【研究動機】

新聞に、「アイヌ民族の現状」の連載が載ってあった。そこには「アイヌの血を引いて、アイヌ文化に囲まれ育ち、小学3年生から中学生になっても、教室で村八分にされたり、体毛を引っ張られたりして、ひどいいじめを受けていた。」¹⁾、「中学校の頃、心無い言葉を投げかけられ母に『なんで私はアイヌなの』と泣きついた。」²⁾など差別され、いじめに遭い、辛い思いをしたことが書かれてあった。

また「アイヌの出自について今まで一度も話したことが無かった親戚と語り合うようになった。とても不安だったが、話してみると『自分はアイヌとっていない。』『アイヌの血を引いていることを周囲にどう伝えたら良いのか』などと同じような葛藤を抱えていた。」³⁾など周囲のアイヌ民族への無関心さ、アイヌが誰にも言えない孤独感が切に訴えられていた。

一方、そのようなアイヌ民族への差別、偏見、いじめを受けつつも「自然からの恩恵を受け素晴らしい文化を伝えること」や、「大切なのは過去ではなく自分がどういう人間で何をしようとしているのか、いかにそこへ進むのかということに気が付いた。」²⁾という自分なりのアイデンティティを持ち力強く生きている姿もあった。

2018年札幌で行われた大学院生の石原氏の講演会⁴⁾では彼女の家族4世代、曾祖母、祖母、母、そして本人のおよそ100年余りの間で、同じ家族であっても過ごした環境の違いや、生きにくさを感じる社会の構造の違いで、アイヌとしてのアイデンティティがかなり違うことが話されていた。

以下講演会での内容の一部である。

曾祖母は、アイヌ民族の風習を子供に伝えようとしなかった。母はアイヌ文化を身に着けてないことで自らの存在を悩んでいた。そして本人は12歳の時に母から和人とアイヌの血を両方引いていることを聞かされ、他言することを長らく沈黙していた。アイヌのことを言うてはいけない、自分は、ダメなことを背負っていると思っていた。

自分のようにアイヌのルーツを持ち沈黙している人は北海道だけで約10万人⁵⁾はいる。また自分はアイヌとっていないなくても自分の出自を知っている人から「ルーツを否定しているのか」と言われ、そんな自分の置かれている状況に混乱して、自分は何者かと苦しみ、その苦勞も周囲から理解を得られないでいる。⁴⁾

という苦悩を切実に話されていた。

筆者自身は、生まれ、育ちは北海道である。小さい頃から何となく「アイヌ」という言葉を口に出すことは、タブーだと思っていた。親から言われたわけではない。だから小学

校のころ一学年上にアイヌの人がいても関心を持たないように遠巻きに見ていた。知らない振りをしていることが良いことだと思っていた。全く無視していたわけではないが、当たり障りがないようにしようと偏見の目で見っていたのだ。

今現在、新聞、雑誌、テレビなどで「アイヌと社会」に関して頻繁に報道されている。筆者は、「アイヌ」について実は何も知らずにこの北海道に住んでいたことに気づき、大きな衝撃を受けた。すなわち、無知は、偏見、差別を生むとされているからである。

筆者は今プレイバックシアターを学んでいる。その学んでいる者として今からでも遅くはないと信じ、少しでも多くアイヌ民族について知り、そこから多く学びたいと思った。そしてその学んだことが、プレイバックシアターを実践するときの場づくりに役立つのではないかと思った。

【研究目的】

本稿は、プレイバックシアターの公演においてアイヌの方の事例をストーリーに想定し、プレイバックシアターがアイヌ民族と和人の相互理解にどのように役立つかを検証する。

II アイヌ民族について

1. アイヌ民族とは

アイヌ民族とは、古くから北海道を中心に、東北地方北部やサハリン（樺太）、クリル（千島列島）に生活してきた先住民族をいう。アイヌの人々は、独自の言語や、生活習慣を持ち、かつては主に狩猟、漁労、採集によって自然と共生してきた。アイヌ民族には、独自の文字はなく、全て口承で伝承されてきた。そのため江戸時代に和人が記録を残す以前の姿を知ることは難しい。現在、北海道の人口は、約538万人⁷⁾であり、その内アイヌ人口は、約2万人である。和人と変わらない日常を送りつつ、アイヌの伝統復活に取り込む人々も多い⁷⁾。

2. アイヌ民族の軌跡

アイヌ文化の成立は、今日における伝統的なアイヌ文化とされる生活や、社会、それらを取り巻く信仰などが形作られた時期で、13世紀から14世紀といわれる。この時期からアイヌ社会では交易を盛んに行っており、アイヌと和人には交易の主導権を巡る争いがあった。15～17世紀には、北海道に松前藩が誕生しその松前藩によって和人に有利な交易体制を強制され、厳しい雇用、過酷な労働を強いられ女性に対しては、理不尽に情夫となる者が出る有様であった。アイヌは、やむを得ず蜂起した⁷⁾。

アイヌ民族と和人の歴史上、最も重要な戦いが三度あった。

○1457年のコシャマインの戦い

アイヌと和人の最初の戦いでアイヌの首長のコシヤマインは、和人の武田信広にコシヤマイン父子を殺害された。武田は、蝦夷地の支配者に上り詰めて行き後に、松前藩の藩祖となる⁸⁾。

○1669年のシャクシャインの戦い

松前藩によって和人に有利な交易体制を強制されることに、アイヌ民族は長年にわたって不信を募らせていた。その怒りを爆発させた大蜂起である⁷⁾。アイヌの首長であるシャクシャインの呼びかけに多くのアイヌ勢力が呼応し東西蝦夷地で300人以上の和人が殺害されたという。松前藩は、和解をしようとシャクシャインらを呼びつけシャクシャインらはその祝宴の席で酔わされアイヌ側の指導者74人と共に松前軍によって謀殺された⁹⁾。指導者を失ったシャクシャイン軍は、結局は敗れ去り、以後は長くアイヌの人々の虐げられた生活が続くことになる⁷⁾。

○1789年のクナシリ・メナシ地方のアイヌの蜂起

和人、場所請負人たちのアイヌの人々に対する過酷な扱いや、不公正な賃金の支払いなど非道のふるまいが横行するとアイヌの人々の間に和人への不満が増大した。まずクナシリ島の人々が立ち上がり、ついでメナシ地方の人々が立ち上がり和人の運上屋などを襲い、番人たちを殺害するに至った⁹⁾。そこに調停役として入ったのがクナシリ首長のツキノエたちであった。松前藩の武力行使を前に、戦いの困難さや、後の交易に支障が出ることを懸念しての判断によるものだった。しかし決戦は回避されたものの、その翌日処刑が言い渡され更にこの時一緒につかまった牢内のアイヌが騒ぎ出したため全員が鉄砲などで撃ち殺されてしまった。この時、その調停役とした長老のツキノエたちは、アイヌの中で松前藩に協力した者として「御味方蝦夷」と呼びその肖像画も残されているが⁹⁾、彼らの心中は如何ばかりであっただろうか。

そしてクナシリ、メナシのアイヌ社会は松前藩に完全に屈服することになり両者の関係が決定づけられた。

この三度の戦いは、アイヌ民族にとっては、和人との関係のうえで大きな転回点となった⁹⁾。明治時代になり、政府は、北海道開拓と経営のため1869年に開拓使を設置し、蝦夷地を北海道と改称した。そして和人に北海道への移民を募った。2年後には戸籍法を制定し戸籍の編成を開始しアイヌ民族は、平民でありながら旧土人と呼ばれた。この和人との区別が後のアイヌ民族への差別につながっていくことになる⁷⁾。

1899年明治政府は、北海道旧土人保護法を制定し、アイヌ民族の土地を一方的に取り上げ、日本名を押し付け、日本語使用を強制しアイヌ語禁止も同然にした。生活習慣も一部禁止し、あげくに鮭・鹿の捕獲も禁止してしまう。アイヌ社会の生業の維持、言語・文化

などの発展も困難になっていく。つまり、この法律の柱は、アイヌの人々に土地を与えて農耕への従事を促す一方、日本語の取得などにより和人への同化を進めるものだった。言い換えるならば、アイヌを政策的に和人に仕立て上げるというものである。良い日本人になるためというのが前提であったので、アイヌ児童・生徒は、自分の属する民族の言葉も文化も排除されてしまった。アイヌとしての誇りを持たされることはなかったのである。明治以降のアイヌ社会は、増え続ける一方の和人社会に飲み込まれて行くような事態になっていた¹⁰⁾。

1945年太平洋戦争の敗戦後は、民主化が訪れ、アイヌ民族復権の動きが見られ、新たな時代の幕開けとなった。1960年代の高度経済成長期は、日本経済は、飛躍的に成長したが、アイヌ民族と和人との経済的格差や差別の意識は解消されないままだった。80年代には、首相自らが「日本は単一民族国家であり差別を受けている少数民族はいない」と発言する有様である⁹⁾。

1997年(平成9年)旧土人保護法は廃止され、新たに「アイヌ文化振興法」が制定された。このアイヌ新法の制定によってアイヌ民族の存在が法律上、初めて認知された意義は、極めて大きい。それまで和人によってたびたび唱えられてきた日本の単一民族国家観を否定させたからだ。しかし、先住民族としての尊厳や、権利、生活の保障に全く触れられていない⁸⁾。

このように150年もの長期にわたり虐げられてきたアイヌ民族の歴史は、現在の生活にも影響を与えている。

以下は2018年北海道新聞に「アイヌ民族のサケ捕獲、先住民族の権利問う」について掲載されたものである。

某アイヌ協会の会長は、「もともとあったサケを自由に捕る権利を奪われた。」と許可申請を出さずに儀式用サケを川で捕獲しようとした。同会長は、「昔は、ここに17, 18軒のアイヌ集落があったの。それを崩壊させたのが和人だ。我々の先祖は、若い男に強制収容されて働かされ、女は手込めにされた。それは、3代か4代前の話だ。それを考えたら和人に対して腹ただしいじゃないか。祖先はここでサケを捕って暮らしてきた。それを再現して何がわるいの。」¹¹⁾

このことは、先住者であるアイヌの人々の権利や、昔から大切にしてきた生活様式を無視した出来事であり、そしてそれは、アイヌの祖先への酷使と差別の歴史を物語っている。

Ⅲ アイヌ民族をめぐる差別とそれが起きる背景を探る

2016年2月、内閣府によってアイヌ民族に関する全国調査結果が公表された。それによると、アイヌへの現在の差別や偏見について、回答者がアイヌの人々の場合には、72.1%が「あると思う」と答えたのに対して、国民全体を対象とした同様の質問では、「あると思う」が17.9%と低く、両者の間にかかなり大きな意識の差が見られた。

さらに差別や偏見があると思うと回答するアイヌの人々のうち、実際に差別を受けたという割合は、36.6%である。そのことは、差別が「あると思う」という割合からは、低下するものの、今現在も、決して少なくはないアイヌへの差別が実際に「ある」様子がうかがえる¹²⁾。

さて、先にも論じたように北海道において、アイヌ民族が0.37%で和人は、99%以上の大多数を占めている。

文芸評論家の岡和田晃氏は、

人間が他者を差別するという問題は『あいつらは劣っていて、俺達が偉い』という感情から生じる。それが社会的に追認されると、差別が形成されてしまう。そうした状況を作らないため、公教育では、『差別はいけない』と日常的に教え込んでいるはずだが、意識のリミッター（抑制する機能）が解除される場合がある。その一つが、マイノリティー（少数者）であるアイヌ民族である¹³⁾。

北海道における植民地主義的な支配の歴史があり明治期以降、開拓使等は、先住民族であるアイヌを劣った存在として捉えアイヌ語や、独自の文化を否定し日本語など和人の文化を強要し「日本社会に同化しない方がおかしい」という考え方は、アイヌ民族も含めた道民、ひいては国民の意識に内面化するレベルにまで浸透している¹³⁾

と述べている。

教育社会学の佐々木千夏氏¹²⁾は、

アイヌの人々をめぐる差別問題は、和人からアイヌ民族への差別という形で語り継がれ、認知されてきた。ところがアイヌの人々が語る「差別」を細かく調べていくと、たとえばアイヌ民族の方が多数派となる場所では、和人が差別される対象になる事例も確認でき、多面・重層的な構造の中で差別が‘受け継がれてきた‘ことがわかる。アイヌ社会における和人差別として和人よりアイヌの人々のほうが多数派となる場面として、アイヌ協会などの民族活動の場がある。アイヌの配偶者をもつ和人妻・和人夫がこうした活動に参加した際、アイヌの血筋にあるものから、アイヌ語で和人を意味する「“シャモ”のくせに」と差別的な言い方をされることは、珍しくない現実がある。さらに、現在アイヌ差別は和人とアイヌの関係性だけで完結するような状況ではない。

誰がアイヌ民族かということは和人よりもアイヌの人々の間で認知されやすい。何よりもアイヌというエスニック・アイデンティティを抱え続けるのはアイヌ自身である。そのため、アイヌ社会の内側で互いに偏見をもったり差別が起きるといった実態が徐々に確認されつつある。このように民族内差別は、民族差別と表裏一体の関係にあり、和人からの差別がいまだに根強いからこそ、その影響がアイヌ同士の間にも波及し、互いに差異化しあうという状況を生み出し、民族内差別として沸き起こってきているという見方ができる。そうだとすれば民族内差別は、今もなお和人からの差別や偏見がアイヌの人々を苦しめていることの証左である。民族内外を含むアイヌ差別をなくすためには、なによりもまず、現存する和人とアイヌの間に生じている民族差別の解消に努めなければならない¹⁴⁾。

と述べている。

そして2018年3月内閣府の「国民のアイヌに対する理解度についての意識調査」によると、現在、アイヌに対する差別や、偏見があると思っている人が72.1%と多数を占めており、その理由としては、「漠然と差別や偏見があるイメージがある」、「アイヌが差別を受けているという具体的な話を聞いたことがある」等が50%を超えており、「その他」の具体的差別内容としては、身体的特徴によるものが多かった。

差別の原因・背景としては、「アイヌの歴史に関する理解の不十分さ」であることを示している¹⁴⁾。

以上をまとめてみると、今もなおアイヌ民族への差別が実際に「ある」ということが明確になっている。正当な理由なく不利益を生じさせる感情が社会的に追認され、それがマイノリティーのアイヌ民族が対象となっていることや、アイヌは、日本社会に同化しないのはおかしいという偏見、和人からアイヌへの差別という形で語り継がれ、認知されてきたという理不尽な先入観、北海道における植民地主義的な支配の歴史的な事実が浮き彫りになった。人知れず心を痛めているアイヌ民族が自分達の身近にもいるであろう。多様なアイヌの人々がいることに配慮し地域住民がお互いに理解し合い分かち合う、そのような場が必要なのである。

「誰もがたとえ世の中から忘れ去られ、ひそやかに生きている人でさえ、そのひと時、人々に注目され、ストーリーを語り、周囲の人に耳を傾けられる。」⁶⁾と宗像は述べている。このような場、そしてこの手法がプレイバックシアターなのである。

IV プレイバックシアターの可能性

ここでアイヌ民族の差別にまつわる事例を借りて、プレイバックシアターの公演で語られたストーリーとして想定し、どのようにプレイバックシアターの要素が関わるか考察していく。

1 演じられた個人の実体験を観ることで、観客は、事実を受け取り、共感できる。

宮島⁸⁾が某町で多くのアイヌの方々と日常的に出会うことになり、そこで知らされた差別の現実である。アイヌ女性Aさんは以下のように語ったと述べている。

「うちの子が学校から帰って来るなり、
『母さん、あのさ、あれだもね・・・、アイヌっているんだもね』っていうの。
それで私、『そうだよ。アイヌってあんたどう思うのさ』って聞いたんだ。そしたら
『いやあ、わし嫌いだよ、そんなもの』っていうもんだから
『バカだねあんた、そんなこと言うもんじゃないよ』っていったんだ。したけど私、胸
がドキドキして、おっかなくて
『おまえもアイヌなんだよ』っていえないんだわ。ひがんで私みたいにぐちゃぐちゃにな
ったらこまるしょ。おっかなくて教えられないの。だから、うちのいま中学一年の子
も自分のことしらないんだよね・・・。」⁸⁾

このAさんが、プレイバックシアターのテラー席で語り、それが再現されたとする。このストーリーは、我が子に「おっかなくて教えられない」と語られたAさんの一言に、「これまでにアイヌ民族が歩んできた長い苦悩の歴史、そして今なお差別の実態が示されている」⁸⁾と宮島は述べている。

アクターは、Aさんを尊重しAさんの実際に体験したことのみ演じられる。もし、アイヌ民族に対して行った差別の歴史的な事実という社会問題へとストーリーが再現されたならばテラーの個人的体験は、その劇の中に埋もれてしまいテラー席に座ったAさんの存在は、時間の経過とともに希薄になってしまう⁶⁾。

ストーリーは、Aさん本人が見たもの、感じたものであり、Aさん独自にとって我が子に対する壮大なる愛の主観的事実であり、心理的事実である。ゆえに観客は、自分達の周りで起きたことを素直に受け入れ、Aさんがどんな辛い思いをしたかをも共感、共有できる。

プレイバックシアターは、テラーが語ったとおりに、テラーが見たいと言った深さにのみ演じる。そのストーリーをどこまで見るか、どの程度感じるかは、コンダクターやアク

ターが決めるものでなく、テラーや、観客が決めるのである。そして尊重されるのは、テラーだけではない。会場には様々な人が集まることになるが、どのような人であれ参加者一人ひとりが大切な存在として尊重される⁶⁾。

ストーリーは、つらい事実が明らかになりラストシーンがテラーの孤独に立ちすくむ場面で終わったとするとき会場に同じストーリーを聞き、見ることによって人と人がつながり、家族的な感情を抱くようになり、会場全体が温かな情感で満たされ、大きな共感、一体感を生み出す⁶⁾ ことだろう。

2 テラーは、安全な場所で懸念表明することができる。

アイヌの人々のライフコースにおいて差別が生じやすいのは、学校生活、結婚、就職および職場であり、とりわけ小中学校でのいじめはアイヌの人々に普遍的な経験となっている¹⁵⁾。こうした差別についてのプライベートな話は、通常、公の場では、語りにくい。しかしプレイバックシアターの「リチュアル」が安全な場を創りだし、それを可能にする。以下の事例は、佐々木¹²⁾による「アイヌ差別の現状」調査で被差別エピソードのケースである。

① アイヌ男性 B さんは、交際していた和人女性から「あなたともう付き合えません。〇〇〇人だから」という手紙をもらい、しばらく考えて〇〇〇は「アイヌ」だということがわかった。その後交際していた相手にも結婚前に身辺調査され、結婚破談になった。¹²⁾

② アイヌ女性 C さんは、アイヌの血筋をもって生まれてきた我が子を、姑から「うちの孫ではない」と否定され、和人の夫さえ「俺の子ではない」、「子は産むな」といわれ離婚した。¹²⁾

③ アイヌ女性 D さんは、中学校時代、教員に就職の相談したところ、一言「あなたアイヌ民族だから」といわれ、就職を支援してもらえなかった。学校ではいじめられることも、恋愛・結婚時に差別をうけることもなかったけれども、唯一、中学校の教員から差別を受けた。¹²⁾

B さん、C さん、D さんがテラー席で語り再現されたとする。それぞれに、深い悲しみ、苦しみ、胸がつぶれる思いなどの気持ち、感情などが再現され B さん、C さん、D さんの中に閉じ込められた思いが多く観客に伝わるであろう。

宗像は、「その場にいる人の心が揺れたとしても、そこに枠があれば、混乱には、至らない。演技者は、穏やかに、しかも毅然とした態度でリチュアルを守り、安全な場所をつくるのである。」⁶⁾と述べている。

個人的体験を人前で話すためには、ここでは自分のプライベートな話を公開してもいいと感じる環境作りが必要になる。誰がなにを語っても批判されない場であること、忠告や、アドバイスや教訓が飛び出さない場であること、無理やり発言を迫られるのではなく自分の意思でテラーになる場であることである。コンダクターが場を守り、これらの環境が約束されることで参加者は安全を感じとるのである⁶⁾。

Bさん、Cさん、Dさんが「安全な場である。」と判断しテラーとなりストーリーを語るなら、そこには「リチュアル」が守られていて「リチュアル」のルールや儀式的雰囲気がある安全な「枠」を作っているからである。

「リチュアル」とは、「儀式」「儀式的行事」「儀式のように必ず守るもの」と訳されている。儀式は、人の何かを変える。儀式が厳粛に、定められた形式の通りに進行すると、その場にいる人の気分は自然と高まる。儀式の場所の空気は、人の意識を厳かで神聖な領域に向かわせる。変化を受け入れる用意をさせ、不条理に立ち向かう気持ちにさせる⁶⁾。

Bさん、Cさん、Dさんはいずれもストーリーを語ったからといって状況が変わるわけではない。しかし演じられた劇を見ることで人がもつ自浄作用がおのずと働き、すっきりとし穏やかな気持ちになっていく。それはつまり、リチュアルという枠があるからこそなのである。

ストーリーを語ったあと、その表情や身体から発するエネルギーがストーリーを見る前のものと変わったとはっきりわかるであろう。そして会場に入ったときは、他人でしかなかった隣の人が、終わるころには親しみを感じる存在になっていることがある。すれ違う人に何と声をかけるであろうか。「よく頑張った。よくやってきたよね。」と話しかけたくなるかもしれない。人生は思うようにならないけれどそして明日からもまたつらい現実に向かうことになるけれど、それでも前を向いて歩いて行こうと感じるかもしれない⁶⁾。これらはプレイバックシアターの儀式的要素が効を奏する結果になり得るのだ。

宗像は「リチュアルは安全な場を提供する。過酷な人生やつらい体験が再現されるとき、『この手法は安全なのか』という質問に出会うことがある。このような時、私はプレイバックシアターがリスクになることはあるが、リチュアルさえ守っていれば安全であると答えている。」⁶⁾と述べている。

3 テラーは、アイヌ民族の文化や精神性、価値観を劇として観ることで、自分を受け入れアイデンティティを明確にすることができる。

ジョー・サラはプレイバックシアターの効果について以下のように述べている。

ストーリーを分かち合うことが、組織や集団に属している人々の中の架け橋となり、すでにある枠をさらに強め、確認し合うことによって感謝し合えることもある。

人は、自分のストーリーを語る必要があるということであり、これは、人間が基本的に必要としていることである。ストーリーを語ることで自分のアイデンティティやこの世の中で自分の居場所、そしてこの世の中そのものの枠組みを確認することができるのである。¹⁷⁾

このようなことから、アイヌの方がアイヌ民族の現在進行形の生きているアイヌ文化について、テラーとなり語られることは、極めて重要なことである。

以下は 2018 年北海道新聞に掲載してあった記事から抜粋したものである。

アイヌ工芸家の女性 E さんは、子供をはじめアイヌ民族について知識が少ない若い人達には、アイヌ文化の楽しさを知ってもらうことを優先にしています。工芸家として刺繍や織物、木彫りの他にアイヌ文化の「宣伝マン」としてアットウシ（樹皮の皮の布）やイタ（盆）などを道内外で実演販売する機会が多くあります。その際、先祖から語り継いだ世界観や風習を伝えるようにしています。例えば「アイヌはアットウシの原料を確保するために木から皮をはぐとき、木の神が樹皮の着物をまとっていると考え、全てをはぎとらず、はぐのを 4 分の 1 程度にとどめていた」といった内容です。

と語られる。²⁾

この E さんがプレイバックシアターのテラー席で語り、再現されたとする。E さんの先祖や自然に対する感謝の気持ちや、アットウシへの愛のある気持ち、若い人たちに知ってもらおうとする熱意、ワクワク感などの気持ちや、感情が表現されるであろう。それは、テラー席の E さんが心の中に眠っていた「語られるべき体験」であり、まさにその時に E さんのストーリーとして語りたという衝動になった瞬間であろう。そしてそれは、E さんにとって「語る」ことで感情が流れ、自分の実体験を再現され、客観的にそれを見ることで、自己肯定感が高まり、癒されたり、自信につながり勇気を得る、自分では気が付かなかった視点、感情など素直に肌で感じ、自分自身がどういう人間なのか、世の中とどう関わっているのか E さん自身のアイデンティティを確認できる時間になり得るのだ。

誰かが自分の体験を人に語りたくなるとき、人に何かを訴えたいとき、聞いてもらいたいと願うとき、そこには大きな理由と深い意味があり、自分の語ったストーリーの中に潜んでいる自分自身の英知を自身で発見した結果であろう。ストーリーは、体験の積み重ねがその人の人生であり自分の体験を語ることによって、人は自分がどんな人間かというアイデンティティを確立できるのだ⁶⁾。

4 自分の行動を客観的に見ることができ、新たな視点を得ることができる。

プレイバックシアターは、ある個人の体験を再現するという営みが、ほかの人を傷つけることにならないようにコンダクターとアクターは配慮する。テラーの話は、テラー中心の物語であるが、ほかの人の尊厳や人権を侵すことのないよう配慮される⁶⁾。

以下は、2018年の北海道新聞に掲載された記事の抜粋である。

アイヌ女性Fさんは、地元のイベントやアイヌ関連の儀式などで伝統文化を発信する日々を送ったそんなある日、O市内の居酒屋でアルバイトをしていると「お姉ちゃんさ。ハーフなの、クォーターなの」と聞いてくる男性客がいた。「私アイヌですよ」。とFさんがそう答えると、客は急に顔を背けて会話をやめてしまった。「今もアイヌに変な印象を持つ人がいるんだ…」と嫌な気持ちになった。

また、結婚を機に引っ越したS市でも似たようなことがあった。ある公共施設でエレベータにFさんと長男が乗った時。中年の夫婦が「あら、かわいいね」と長男に話しかけてきたので、「ありがとうございます。」と笑顔で応じた。ところが、夫婦は「あ、日本語しゃべった」。驚いた様子でそう言うと、その場から立ち去ってしまった。夫婦がアイヌ民族と気づいたかどうかはわからない。ただ、心の中に嫌な感情だけが残った。「みんな違って当たり前という社会になってほしい。マネキンのようにみんな一緒という怖い世の中はやってくるはずがないのだから」¹⁶⁾

このFさんがプレイバックシアターのテラー席で語りストーリーを再現されたとする。居酒屋であった出来事は、Fさんのイライラ感、怒り、反感、疎外感などとても嫌な気持ちが再現されたであろう。一方男性客は、どんな気持ちであったかは、誰もわからない。役者は、Fさんが感じたアイヌに対する偏見をもった男性客を、Fさんの語った通りにその状況のみ演じるであろう。同様にエレベータでの出来事は、Fさんの最初はうれしいとい

う気持ち、そしてその後、怒り、動揺、悲しみ、痛みなど表現されるであろうか。そばにいた子供さんの気持ち、中年夫婦の気持ちはFさんの想像でしかわからない。

プレイバックシアターは、無条件にFさんの話に耳を傾け、Fさんを無条件に受容しFさんの個人の体験を再現する。会場にいる観客の和人の方の中には、ストーリーの中の男性客や、中年の夫婦と同じような体験をした人がいるかもしれないし、同じような光景をみた人がいるかもしれない。または、観客の中で、背景や境遇が似ていたり同じような体験をしているアイヌの方がいるかもしれない。観客は、それぞれに普段の生活や、習慣、など思い起こし、様々な立場の人の気持ちが分かり、視野を広げ、自身の日常生活を素直に見るきっかけにもなる。

しかし先にも述べたようにストーリーは、テラーの目が見たいものであり、テラー独自の感じ方をしたものである。つまりテラーにとっての主観的事実であり、心理的事実である。よって、テラーの語る内容が、客観的事実と異なる場合がある。この公演の会場にいる誰かがストーリーに、登場したとする。コンダクターは、会場の落ち着かない雰囲気を知り、インタビューの最中にFさんが語られているストーリーは、Fさんから見た光景であり、男性客の方、あるいは、中年夫婦にとっての事実は、違っているかもしれないということのコメントをはさむことが必要とされる。コンダクターのこの一言が場の公平さを持ち込み会場内には、安堵感をもたらす。

インタビューにあたって、相手には相手の言い分や、視点があることをコンダクターが口にする。次に公平さを保つために、テラーのストーリーのあとで、相手の人をテラーとして招待する必要がある。それぞれの心理的事実を明らかにし、両方の事実を再現することがプレイバックシアターのゴールである。葛藤を直接に解決する試みではないが、相手に対する理解を深めることが双方の距離を埋める第一歩になる。プレイバックシアターは、個人を尊重するだけでなく、その個人を取り巻くほかの人々も尊重されるように、公平さと正義と真実を失わないよう努める⁶⁾。

ゆえにプレイバックシアターは、様々な立場の人の気持ちが分かり視野が広がり新たな視点を得ることができる。

V まとめ

本稿では、プレイバックシアターが、アイヌ民族と和人との相互理解にどのように役立つかを検証した。プレイバックシアターは、個人の体験を語ることでその個人の思いを分かち合う場であり、人と人の繋がりを生み出す強い力があるということがわかった。

しかし忘れてはならないことは、宗像が述べているように「プレイバックシアターがどの領域でどのように役立つか、それを証明できるのはプレイバックシアターを実践する私たちではなく、プレイバックシアターの場に足を運んでくださる観客の皆様である」⁶⁾ ということである。

今後の課題は、この言葉を肝に銘じて、実際にアイヌの方々のなかでプレイバックシアターを実践することである。日々人間的成長を心してスキルアップしていく所存である。

VI おわり

この論文を書くにあたり、自分にとって何かとてつもなく大事なことを得たような気がします。それは、今は何なのか一口では表せない漠然としたもので、この後にジワジワと形として現れることと思います。このような機会を与えてくださった宗像佳代氏、そして何度も何度も文章見て、ご指導をしてくださった小森亜紀氏に、ほんとうにお世話になり心より御礼申し上げます。また、私が所属するプレイバックシアター・ピグマリオンの代表の山本いく子氏は、資料の協力と励ましをしてくださいました。仲間も支えてくださいました。ありがとうございました。プレイバックシアターに関わる全てに感謝いたします。

VII 文献

- 1) 2018年4月18日 北海道新聞 「アイヌと社会の未来を語る」
- 2) 2018年4月10日 北海道新聞 「アイヌと社会の未来を語る」
- 3) 2018年4月13日 北海道新聞 「アイヌと社会の未来を語る」
- 4) 第26回聖公会「女性」フォーラム in 北海道 2018年7月15日
講演 北海道大学大学院博士後期課程 石原真衣
「サイレントアイヌ」の物語
- 5) 公益社団法人北海道アイヌ協会 アイヌの生活実態
- 6) 宗像佳代 プレイバックシアター入門第一版 明石書店 2006
- 7) 時空旅人 別冊 今こそ知りたいアイヌ
- 8) アイヌ民族と日本の歴史 宮島利光 三一書房
- 9) アイヌ文化の基礎知識 アイヌ民族博物館監修 草風館
- 10) 知里幸恵 銀のしずく記念館ガイド
- 11) 2018年10月14日 北海道新聞 アイヌ民族のサケ捕獲 先住民族の権利問う
- 12) アイヌ差別の現状 佐々木千夏 教育社会学 現在旭川大学短期大学部幼児教育学
科助教 (オンライン) syodos.jp/society/21668
- 13) 2018年4月12日 北海道新聞 「アイヌと社会の未来を語る」
- 14) 「国民のアイヌに対する理解度についての意識調査」報告書
平成28年3月内閣官房アイヌ総合政策室 (オンライン)
www.kantei.go.jp/..rikaido.houkokul60322
- 15) 「北海道アイヌ民族生活実態調査報告」 北海道大学アイヌ先住民研究センター
(2008～2011年)
- 16) 2017年9月24日 北海道新聞 「差別の現状を考える」
- 17) ジョー サラ プレイバックシアター 癒しの劇場 2003年第2版発行
訳者 林亮子 株式会社 社会産業教育研究所

